



® 平成 29 年 12 月 7 日 (木)

No. 14585 1部370円(税込み)

発行所

一般財団法人 経済産業調査会

東京都中央区銀座2-8-9 (木挽館銀座ビル)

郵便番号 104-0061

[電話] 03-3535-3052

[FAX] 03-3567-4671

近畿本部 〒540-0012 大阪市中央区谷町1-7-4

(MF天満橋ビル8階) [電話] 06-6941-8971

経済産業調査会ポータルサイト <http://www.chosakai.or.jp/>

特許ニュースは

- 知的財産中心の法律、判決、行政および技術開発、技術予測等の専門情報紙です。

定期購読料 1カ年61,560円 6カ月32,400円
(税込み・配送料実費)

本紙内容の全部又は一部の無断複写・複製・転載及び
入力を禁じます(著作権法上の例外を除きます)。

目次

☆成長戦略に必要な経営理論《知財版》④5…(1)

☆注目知的財産権法判例紹介 [88] ……………(6)

成長戦略に必要な経営理論《知財版》④5

もし知財人財が“戦略的思考”をもって 世界を見たならば(その9)

正林国際特許商標事務所

所長弁理士 正林 真之

1. はじめに

暴走したトロッキがあって、その軌道上には5人の作業員が作業している。その5人はその暴走トロッキの存在に気付かず、このままではトロッキにひかれて全員が死んでしまう。けれども、あなたはそのトロッキの軌道を変える分岐点に居て、あなたが操作をすればトロッキの進行方向を変えることができる。進行方向を変えたもう一方の軌道上には、1人の作業員が作業をしている。むろん、あなたが

軌道を変えれば、先の5人は助かるが、軌道を変えた先で作業をしている1人は死んでしまうことになる。

こうした状況下で、あなたは軌道を変えるのかどうかというのが命題であり、それによって論理的思考力を試そうというのが、この設例の目的である。むろん、こういった設例では、暴走トロッキを止めるための他の手段は一切無いものとされているし、5人を助けるためには1人を犠牲にするしかない状

TH弁護士法人は、アクセス容易な新宿にオフィスを構える弁護士事務所です。

TH弁護士法人の集中分野の一つである知的財産法務を担当する弁護士・弁理士高橋淳は特許侵害訴訟を中心として活動してきましたが、近時は、職務発明規定の作成、変更に関するコンサルタント業務に注力しており、多数の書籍、論文の執筆、セミナー、講演、テレビ出演などを通じて職務発明規定変更の実務の第一人者として知られており、多数の相談実績を有しています。

また、平成27年から参加費無料の高橋知財勉強会(原則月1回18時から20時まで。懇親会あり)を主催しており、随時ニュースレターを発行しております。

高橋知財勉強会への参加、ニュースレターの受領等を希望される方は、下記までご連絡下さい。



TH弁護士法人

〒163-0631 東京都新宿区西新宿1-25-1 新宿センタービル31階

TEL 03-6911-2500

E-mail jun14dai@gmail.com

況が設定されている。

これは、論理的思考を試すためのものであり、この書籍によれば、大多数の人が、「軌道を変える」ほうを選択している、とのことである。つまり、1人を犠牲にして5人を助ける道を選ぶわけである。あくまで頭の中で考えることであるから、実際の現場に居たとして果たしてそれができるかどうかは問題ではない。あくまで、「頭が考えたらどうなるか」という、そういう問題である。

こう言う「頭の中で考えるだけなら、どんなことでもできるのではないか」(つまり、考えるだけならどんな残酷なことでもできようが、ということである)という声も聞こえてきそうであるが、その設例には続編があって、「隣の巨漢(太った男)を落とす」パターンが提示されている。

つまり、あなたは橋の上からトロッコが暴走するのを見つけた。橋の直下には、その軌道がある。軌道の先には5人の作業員が作業をしていて、このままにしておけば、かの暴走トロッコはその5人の作業員全員の命を奪ってしまうことになるだろう。けれども、あなたの隣には、巨漢(太った男)がいて、橋の上から身を乗り出して、簡単に突き落とせる。この巨漢を突き落として軌道上に載せれば、暴走トロッコを止めることができる。むろん、軌道上に上手く落とせないとか、他の手段があるというのは考えなくともよい。ただ、あなたが身を投げたとしても暴走トロッコを止めることはできず、先の5人は死んでしまう。先の5人を助ける方法は、隣の巨漢を突き落とすしかないということになったら、あなたは果たしてどうするのか。これが、「隣の巨漢(太った男)を落とす」のバージョンである。

「考えるだけなら、どんな残酷なことでもできる」と思った方もいるかもしれないが、結果はそうはなかった。先の「軌道を変える」設例で、「5人を助けるために、1人を犠牲にする」途を選んだ人の殆どが、突き落とさない道を選んだ。同じく「5人を助けるために、1人を犠牲にする」ことなのに、なぜなのかということを考えるのが“思考実験”というものである。確かに、軌道を変えることは、頭で考えるだけならできること、実際にその現場に居たとしたらできないことなのかもしれないが、巨漢を突き落とすことは、頭で考えただけでもできないのである。なのでもし、実際に現場に居たとしたら、絶対にできないことであるし、絶対にしないこと、絶対に起こらないことである。

なぜ上記のような結果になるのかというと、要は、

軌道を変えるほうは死ぬ状況が全くの等価であるから、基本的には数の問題で解決されることになる、というわけである。つまり、「質が全く同じなのであれば、量で比較される」ということになるわけである。けれども、巨漢を突き落とす方は、性質が全く異なる状況なので、単純に数だけで比較することはできないと、そういうことになる。

2. 決断のときと知識労働者のマネジメント

ここで、このような設例について、自分には全くの無関係であると、そう思っている方もいるのではないだろうか。それはそうであろう。名探偵コナンでもない限り、そうそう偶然に殺人現場に遭遇することなど、あり得ない。

けれども、会社を初め、いくつかの組織には、これと似たような状況が存在する。そう、背筋を何やら冷たいものが走った方も居られるかもしれないが、リストラの場面である。リストラの場面では、削減するものが、事業であれ、人間であれ、特許であれ、かような選択肢の上に立たされるものである。

実際、特許事務所の人員整理の場面では、このあたりを完全に間違っ、自滅の道を歩んでいる例も見られる。例えば、年収1500万円のマネージャーを切るか、年収300万円のバラリーガルを5人切るのか。どちらも人員削減による費用の節減効果は同じである。むろん、より負担が少ないのは、1人を切ることである。まず、上記の暴走トロッコの例のように、「5人が犠牲になるよりも、1人が犠牲になるほうが…」の考えが働く。そして、実際の現場でも、退職に向かうための面談の数が少なくて済むので、体力的な面でも負担が少ない。しかも、だいたい1500万円ももらうプレーヤーなら、再就職先もある。辞めた後でもそう困らないだろうから、面談もそう困難ではなく、退職時の処遇を話し合えばよいくらいである。なので、こちらのほうが、精神的な負担も少ない。

そしてまた、体力的、精神的な負荷を低減させるために、希望退職から入るところもある。要は、大企業で普通に行われていることをそのまま真似するわけである。けれども、それで上手く行った例を見たことがない。そんなことを特許事務所で行えば、どこでも通用するような優秀な人材から抜けていき、他に行き場の無いような無能な人材が残るだけである。そうであるにもかかわらず、ある程度の規模の事務所では、希望退職から始まり、次に高給取りから切っていくようなことが行われていたりするので